

ドナウの四季

2011年・新春号・No.9

音楽教育の妙味	石本 裕子	1
ハンガリー赤泥流出事故の背景と教訓	家田 修	2
大空への挑戦	加藤 詩乃	4
20年振りの七転八倒	盛田 常夫	6
留学生自己紹介	栗村 岬・松永 みなみ	8
緑の丘日本語補習学校	高木 典子	10
2011年のゴルフシーズンを迎えるにあたって	宮崎 好文	11
スポーツ行事・運動サークル情報		12
白組～がんばるぞ～!	竹内 更	13
ハンガリーのみなさん Köszönöm szépen	安島 昇	13
満喫した南アフリカW杯	盛田 常夫	14
「ドナウの四季」ホームコンサート		15

桑名 一恵・町田 百合絵・岩瀬 桐子・松永 みなみ

珠玖 加奈子・香川 真澄・坂井 圭子



コルナイが綴る 20 世紀中欧の歴史証言

1928年に生まれたハンガリーの経済学者コルナイの自伝。
第二次大戦後の社会主義計画経済から現在までのライフヒストリー。

「週刊ダイヤモンド」2006年ベスト経済書第9位にランクイン コルナイ・ヤーノシュ自伝

— 思索する力を得てコルナイ・ヤーノシュ【著】 盛田常夫【訳】

◆好評発売中! ◆定価 4935 円 (税込) ◆A 5 判 / ISBN 4-535-55473-0 ◆日本評論社



体制転換 の経済学

黄色の教科書シリーズで知られる専門学部の定番テキスト。体制転換の理論と転換直後の現状を分析。各大学で教科書として使用。

盛田常夫著

第一部 社会主義経済の失敗

社会主義崩壊をもたらした社会的退化への論理を構築。交換経済と再分配経済の比較分析に新たな視点を提供。

第二部 ポスト社会主義経済

体制転換の過渡期の問題をすべて取り上げ、解決の道筋を示す。地域による体制転換の違いを解明。

■ 新世社 新経済学ライブラリー20 定価2781円(税込)



なぜハンガリーは独創的な科学者を輩出したのか

20 世紀を創ったハンガリー人 マルクス・ジョルジュ【著】 盛田常夫【編訳】

■ 定価 3045 円 (税込) A 5 判

■ ISBN 4-535-78331-4

異星人伝説

ハンガリーは 20 世紀の科学の発展に貢献した多くの頭脳を輩出した。なぜなのか。大きな足跡を残したハンガリー出身の科学者たちの生い立ちからその到達点までを描いた評伝。

体制転換20年の歴史的・理論的総括の書

ポスト社会主義の政治経済学

体制転換20年のハンガリー：旧体制の変化と継続

盛田 常夫著

■ 2010年1月中旬発売 日本評論社 定価3800円

新しい概念を駆使して、体制転換以後の中欧社会の状況を分析。体制転換の社会哲学から経済システム、政治体制、社会動向、イデオロギーにいたるまで、社会経済の全般を捉える。



音楽教育の妙味

石本 裕子

世界中の音楽家が演奏活動とともに熱心に後身の指導をしています。名演奏家が必ずしも名指導者とは限りませんが、生徒の演奏に指導者の影響が現れるのはやりがいのある仕事です。それは、転じて自身のさらなる演奏に影響を与え、実は教えているようでいて生徒から教えられているとも言える、味のある世界です。

長い音楽家生活を生き、2010年3月にブダペストで第一回ピアノセミナー開催の運びとなりました。日本から音楽学生さんや専門家を招きリスト音楽院教授ヤンドー・イエヌーと私自身のピアノレッスンを各3回計6回、1週間で集中的に受講しました。この他、録音ディレクターのイボヤ・トゥース氏に特別講座をお願いしました。彼女はピアニストと指揮者として高名な、国立フィル率いるゾルタン・コチシュ氏のバルトーク全集を現在進行で録音なさっています。コチシュ氏にして深い尊敬の念をお持ちの素晴らしい音楽家です。

話しは遠く遡り、20代前半はニューヨークのジュリアード音楽院で学びました。素晴らしい教授陣を擁する世界有数の環境を大いに満喫しました。移民で成り立つアメリカ、教授陣はロシア・ヨーロッパの御出身、その中にバルトークの世界を開いて下さった、ハンガリー人でバルトーク高弟のジョージ・シャンドール先生もいらっしゃいました。ニューヨークの音楽教育は、ニューヨーク・フィルの団員としてご活躍の教授陣も含め、国際的なレベルの指導者達でした。権威とはかけ離れた、生徒達を受け止め、その上で正しい方向へ導いて下さる大らかな先生達。演奏家として教育者として、たとえ高齢になられても、弛まぬ探究心をお持ちの先生達は、真の謙虚さと秘めた自信の裏打ちがおありで、これこそが若い才能を暖かく受け入れる優しさに繋がっていました。

20代ニューヨークで培った音楽の世界を携えて日本へ戻りました。時代は90年代の始まり。当時のアメリカ社会の大らかさに比べると「閉塞感」を感じたものでした。

音楽家は、何より心から感性を表現してこそ存在です。日々の生活と離れて、音楽にだけ感情表出をするのはむづかしいものです。日本人の奏でる音楽が、ともすれば感情に乏しく縦割り軍隊的なのは、この精神性が影響しているのでしょうか。テクニックは素晴らしくなる一方で、「心」が押さえつけられているのでは。



演奏活動の傍ら、桐朋学園短大音楽部で10年の教鞭をとりました。加えて、お子さん達から他大学の学生さんまで数多く教えて来ました。幸い子どもは、頭で考える前に身体が反応します。才能があればあるだけ課題を難なくクリアします。しかしながら、大人の生徒さんには、硬さ、無感動さ、閉塞感を感じました。小さい時から勤勉に叩き込まれた奏法を「素直な心」で弾くピアノに変えるのは、生徒側の「良くなりたい」と願う思いの強さと指導者の忍耐力を必要とします。時間のかかる作業です。

その一方で、私自身の演奏は、幼少時から「心地の良い音楽」とおっしゃって頂く機会が多かったのは幸いでした。それでも後年、さらなる探究心を持ってハンガリーへ渡って以来、より深く高度な音楽性とそれに伴うテクニックへと深く傾倒して行きました。

この間定期的に東京へ戻り日本の生徒達を指導しております。今までの素地にハンガリーでさらに身に付けたものを指導に生かして参りました。日本社会を日々背負いながら私の細かく厳しい指導を受ける生徒達には、どれほどの努力をしているかと頭が下がる想いです。

素晴らしい先生との巡り会いは大いなる心の財産です。教を請うばかりの時代が過ぎ、責任のある立場で生徒達と対峙するようになると、かつての先生達のお姿に思いを馳せました。ピアノは女子学生が多いのですが、演奏上の課題とともに、若い時代の情熱が30歳も過ぎれば途切れてしまいます。結婚後は他に時間も取られ自我との葛藤に悩み苦しむものです。母性神話の根強い国で女性が自我を持ち続けるのは周りからの抵抗も必然でしょう。幼少の頃から人生を捧げて来た世界が、いつの間にかしぼんでしまう風潮が何とか変わらないかと思って来ました。もっと音楽を心に持つ幸せを感じながら生きてほしいとも願っています。陽の光ばかりが人生ででない事も、音楽を支えに乗り越えてほしいと思います。

このような長年の生徒達との関わりの素地から、ブダペストでのピアノセミナーが生まれました。第一回はお陰さまで恙(つつ)がなく終了いたしました。日本には更なる飛躍に留学を考えている生徒さんも多数です。ヤンドー・イエヌー先生には、楽譜を正確に読む事の大変さ、音楽への理解の深さを教えて頂き、私のレッスンでは具体的な練習方法を習い、イボヤ氏には深く高度な演奏上の技術を学びました。その上ブダペストの美しい街並を満喫し大喜びでした。一つ一つの経験を今後の演奏に生かしてくれたらと願って止みません。

音楽教育は、即物的な結果を求める世界と遠く離れております。長い時間の流れの中で、あらゆる事が少しずつ身に沁みて、その後花開くものです。何かと短絡的に結果を求める風潮の中で、一般の方にはおわかりにくい地味な世界かもしれませんが、演奏は自分をダイレクトに表現する世界、そして、指導は自分の思いが生徒の演奏を通して具体化される世界、どちらも深い彩りがありますが、これからも好奇心や探究心と伴に音楽界に身を置いていきたいと思っております。

(いしもと・ひろこ ピアニスト)

ハンガリー赤泥流出事故の背景と教訓 家田 修

日本のマスク支援

今年の10月4日、大量の赤泥が町を襲う衝撃的な映像が世界中のメディアで流れました。日本でも数日間はこの事件がテレビや新聞で取り上げられましたが、その後、全く続報がありません。欧米メディアも同様です。メキシコ湾での海底油田事故でさえ、流出が止まった後はどのメディアも無言です。この二つは今年起きた世界の二大環境汚染事故だと思いますが、奇しくも、流出量がいずれも70万立方メートル程度で、ほぼ同じでした。メキシコ湾で2カ月以上かかって流出した量が、アイカでは瞬時に町や村を襲ったわけです。

以下は現地調査等をもとにした報告ですが、まず記しておきたいのは、事故という不幸な事態の中で、被災者だけでなく、私達日本人をも勇気づけた話は、日本からの災害支援が的確に行われたことです。去る11月23日に岐阜県ハンガリー友好協会と岐阜ライオンズクラブが42万個の防塵マスクをヴェスプレーム県に寄贈しました。実際には42万個のうち第一弾として航空便で届けられた9万個が現地に運ばれ、残り33万個は船便で年末に届く予定です。ハンガリーに進出している日本企業(ブリヂストン、デンソー、イビデン、ミツバ、NWI社、ソニー、大豊工業)からも1000万フォリントの義捐金が被災者に贈られました。さらに大阪大学でハンガリー語を学ぶ学生が自主的に街頭に立ち、市民から寄付を募って赤十字に寄付金を寄贈したことを、阪大の鈴木宏和教授から聞きました。私の息子も33万個のマスク輸送を安価で引き受けてくれる船会社を見つけてきました。

ハンガリーは2004年にEUに加盟し、日本政府の援助対象国から外れたため、今回のような災害が起こっても日本大使館としては動きようがなく、今回は日本大使館に来た現地からのマスク支援要請が、日本ハンガリー友好協会理事長である田中義具元駐ハンガリー日本大使を経由して、岐阜県ハンガリー友好協会に届き、民間外

交としてマスクの支援が行われた次第です。官民の連携がうまく機能したことを、事故直後に日本支援の話現場関係者に伝え、日本の支援関係者には現地情報を伝えた者として、心から喜んでいきます。

事故の経過

今回の赤泥流出事故の背景と教訓ですが、まず、事故そのものの経過を簡単にまとめます。事故を起こしたのは「ハンガリーアルミ社(正式には「ハンガリーアルミニウム製造販売株式会社」)で、事故現場はヴェスプレーム県アイカ市にある同社所有のアルミ製造工場付属赤泥貯蔵池です。この貯蔵池は周囲2km以上、高さ30-40mの巨大建造物です。

赤泥はアルミナ製造過程で生れる産業廃棄物で、今回流出した赤泥の主成分はハンガリー科学アカデミーの調査によると、酸化鉄33—40%、酸化アルミニウム15—19%、二酸化ケイ素10—15%、酸化カルシウム3—9%、二酸化チタン4—6%、酸化ナトリウム7—11%であり、そのほかに微量の五酸化バナジウム、五酸化リン、二酸化炭素、三酸化硫黄、酸化マグネシウム、フッ素、炭素が含まれていました。赤泥は完全に固体化すると無害だとされますが、今回は大量の水と混じった状態で流出し、PHで最高値の14に迫り、極めて危険な強アルカリ状態でした。事故による死者は10名、負傷者は120名以上で、事故現場をみると、家屋の中まで1メートル以上の赤泥の跡が残っており、もしこの事故が夜中だったら、被害者の数は数倍どころか、数十倍にもなっていたでしょう。事故が日中だったことは本当に不幸中の幸いでした。

事故直後、赤泥は一瞬にしてトルナ川沿いの生態系を破壊し、さらにマルツアル川に流入し、その流域70kmほどを汚染しました。赤泥がラーバ川へ、さらにはドナウ川本流にまで達すれば、下流諸国そして黒海にまで汚染が広がるとの懸念が強まりました。ハンガリー政府は非常事態を宣言し、

マルツアル川に少なくとも数千トンの石膏を投入し、ラーバ川との合流点で大量の中和剤を散布しました。これでドナウ川本流に高PH値の赤泥が流れ込むことは食い止めたのですが、PH値が下がったとはいえ、ドナウ川本流に大量の赤泥が流入したのも事実であり、長期的な環境への影響は、今後の調査をまたなければなりません。ブダペスト市内のドナウ川で大量の魚の死骸が浮かんだとの報告もありますが、公式には、支流で死んだ魚が流れ着いたと説明されています。

他方、赤泥の津波に襲われた二つの町、コロントールとデヴェチュエルでは600戸以上が被害を受け、建て替えない代替地への転居が始まっています。今一番の問題は700ヘクタールを越す農地や森林を覆った赤泥が乾燥して粉塵化し、大気を汚染し始めていることです。ハンガリー衛生局は赤泥粉塵を吸うと呼吸器に健康被害を起す恐れがあると警告し、マスクの使用を促しています。農地などの赤泥除去は来年の6月頃までかかるとされ、それまでの間、高品質の防塵マスクが必要です。マスクは毎日取り換える必要があり、近隣の住民すべてに配布するには十万個単位で確保しなければならず、国内や欧州で調達するのは困難とのことです。このためマスク文化を持つ日本に支援が求められたという訳です。

事故の原因

直接の事故原因は貯蔵池外壁の一部が地盤の緩みで崩壊したことにありますが、責任を問われた会社幹部は会見で、「きちんと法律を遵守して管理を行ってきた」とし、会社側に過失責任はないと言い切りました。加えて「今年の降雨量は今年の3倍もあり、それが貯蔵池の赤泥の上に溜まっていた」と述べ、事故は天災だったと説明しました。さらに「赤泥はEU基準に照らせば、有害物質ではない」とし、国民から強い反発を買いました。

さらに、貯蔵池外壁には前から亀裂があったのに会社は放置したなどの内部告発も現れ、他方で監督官庁の検査体制が甘かったという指摘もあり、オルバーン首相は現地視察で、「この壁の崩壊が瞬時のことだけで起きたとは思われない。工場側、そして監督官庁が何故気づかなかったのか、その原因を究明する」と発言しました。実際にもすぐに検察当局が事故原因の究明に乗り出し、10月11日にはハンガリーアルミ最高経営責任者の身柄を拘束しましたが、長期拘留の「正当な理由」は見つからず、すぐに釈放されました。

EU加盟と赤泥、そして民営化の闇

ハンガリーはEU加盟の際、環境分野では厳しいEU基準の即時導入は困難との判断から、さまざまな猶予措置を求めました。しかし今回の事故はこの見方が一面的だったことを明らかにしました。赤泥はEU加盟前のハンガリー国内法によれば有害廃棄物だったのです。それがEU基準に合わせて無害な産業廃棄物に認定し直されたのです。しかしハンガリー政府は今回の事故対応のなかで、「赤泥は2000年第25号法の第3条第1項bd及びcに照らして有害物質」とする声明を発表し、この認定にあわせて対策を立てるとしました。企業の事故責任を問う場合、赤泥が有害物質であるかどうかは大きな争点ですが、EU基準とハンガリー法体系の二重性がどう影響を及ぼすのか、今回の事故責任究明の鍵となるのではないかと思います。

ハンガリーアルミ社は資本金30億フォリント、従業員1100名、EUでのアルミナ市場占有率12%(自社広報による)を誇るハンガリーを代表する大企業です。しかし株式は非上場で、事実上、三名の個人が所有し、その三人はいずれも数百億フォリントの資産を持つ「大富豪」です。彼らは社会主義時代において企業経営陣ないし官僚畑にいた人物、つまり旧体制のエリートで、1990年代の社会党ホルン政権下で行われた国有企業民営化の中で巨額の富を築いたハンガリー版「オルガルヒア(新興実業家)」です。2004年から2009年まで

社会党政権の首相を務めたジュルチャーニもアルミニウム産業の民営化で資産を蓄えたオルガルヒアの一人で、ジュルチャーニはEU加盟交渉が最終段階にあった2002年から社会党政権の中核にあり、EU基準に合わせた赤泥「無害化」指定に影響力を行使したといわれています。また今回事故を起こしたアイカのアルミ工場の払い下げでは、赤泥貯蔵池に対して30億フォリントに上る設備投資を行う約束と引き換えに、払い下げ価格がタダ同然の1000万フォリントに設定されたと言われていますが、11月にオルバーン政権はアルミ産業の民営化文書を公開しましたので、近いうちに民営化にまつわる闇の部分が解明されるはずですが。

今回の事故直後、ハンガリー政府はEUに専門調査団の派遣を要請しました。それに基づきEUは「監視情報センターMonitoring and Information Centre」から専門家6名を派遣し、10月16日に調査結果が発表されました。それによると「飲み水には全く問題がなく、空気中の粉塵は健康被害に対する許容量を上回っていない」ことに基づいてこのような結論を出すことは極めて不自然です。当然、ハンガリー政府はこの結果に納得できず、「災害の撤去・復旧作業に際して防災本部はハンガリー科学アカデミーが行った調査結果ないし同アカデミーが認めた調査結果のみに基づいて行動する」と反論しました。実際、11月に入ってハンガリー側の調査結果が公表されると、水質検査では汚染は認められないものの、大気汚染は「デヴェチュエルでのすべての観測地点及びコロントールでの観測地点において、衛生許容基準を8-24%上回った」ことが判明しました。ハンガリーの専門家が恐れていたことが現実となった訳です。

EU議会は先の調査団の報告書に基づき、10月19日にハンガリー赤泥事故を議題として取り上げ、審議を行いました。そこでは赤泥を危険物質に指定すべきだとの意見も出ましたが、結局、既存法規の修正は不要で、適正な運用で対応できるという

EU委員の答弁で審議は終了しました。確かにEUの対応は専門委員の派遣でも、EU議会審議でも迅速でしたが、あまりにも迅速すぎて、最初から結論ありきではなかったかと思います。

赤泥の再利用

今年の3月にアルミナ関係国の国際会議がバンクーバーで開催され、「ボーキサイト残渣(赤泥)はアルミナ生産量1トン当たり約1.5~2.5トン発生し、高アルカリ性であり少量または微量の重金属と放射性核種に関連した環境リスクがある。赤泥管理にかかわる技術的、経済的に健全なオプションを開発する」との宣言が出されたばかりでした。アルミナは欧州では斜陽産業ですが、アジア太平洋圏は世界的なアルミナ生産地域です。なかでも中国は世界生産の30%を占める世界最大の生産国で、毎年3000万トンの赤泥を生み出しています。

日本は1970年代の年産160万トン体制から順次後退し、現在は1万トン程度です。赤泥は世界の主流である陸上処理ではなく、海洋投棄で処理してきました。しかし環境保護の立場から見直しを迫られ、2015年までに海洋投棄を全廃する予定です。現在はオーストラリア、インドネシア、ニュージーランド、ベトナムなどで現地との共同事業化によるアルミナ生産に力を入れています。

ハンガリーでの今回の事故を機に赤泥の管理体制見直しが急務となりましたが、日本は環境保護の立場からアルミナ生産を輸入に切り替えた以上、世界的な見地から赤泥の管理に責任を負う立場になりました。ハンガリーでは再利用のための総合的研究も進んでおり、日本にも研究の蓄積があります。赤泥を厄介者から資源化することは地球規模の課題であり、日本がハンガリーなどと共同して基礎研究や技術開発の一翼を担うことは大きな世界的貢献になると考えます。

アルミ缶一つを作る度に、その倍の赤泥が生まれている現実があります。

(いえだ・おさむ

北海道大学スラブ研究センター教授)

大空への挑戦(後編)

加藤 詩乃

10月1日から8日、ハンガリー・デブレツェンで第19回熱気球世界選手権が開催されました。日本からは7機の熱気球、7名のパイロットとそれぞれのクルー約40名が参加しました。

前回『ドナウの四季・秋季号』で紹介したように、熱気球はスカイスポーツの一種です。世界選手権では、風まかせの熱気球を、いかに正確に飛ばすかを競います。同時に海外競技に参加するためには、機材の国際輸送はじめ、競技車両の手配など様々な事務作業をこなさ、かつ「コスト削減」しなければなりません。日本国内で行われる競技と、海外での競技との大きな差は、こうした手配に関する点でしょう。

今回、心配していた手配に関する事柄は、万事うまくいきました。レンタカーも空輸も滞りも、メールとスカイプ(インターネット電話、チャット)による綿密な打ち合わせが功をなしました。これは、異常に細かく神経質な私たち日本人のリクエストにも、辛抱強く、誠実に対応してくださったハンガリーの皆さんのおかげだと思っています。

～日本出場枠7という意味～

熱気球世界選手権の出場枠は、もともと各国に割り当てられている出場枠と、前回2008年の世界選手権の実績により決まります。

日本では40年前に初めて熱気球が空を飛びました。外国の物語の中に登場する熱気球に憧れた少年・梅棹エリオの情熱により初めて製作されたのです。国土の狭い日本は、熱気球に不向きな土地です。しかし、経済成長とともにロマンある乗り物として熱気球の愛好者も増えてきました。熱気球の登録番号は通し番号となっており、2010年10月末で1400機の熱気球が日本気球連盟に登録されています(現存しない機体も含む)。

90年代をピークに、日本の熱気球の愛好者人口はやや減少しています。これは日本の経済的な背景、様々なムーブメントが影響していると思われます。しかし、愛好者

人口の減少とは異なり、日本の熱気球の競技レベルはここ10年で飛躍的に向上しました。06年には世界選手権が栃木県で開催され、6機出場し最高5位に日本は食い入りました。08年は7機、最高7位。こうした結果から、2010年は7機の出場枠が決まりました。

また、特筆すべきは2世パイロット誕生ということでしょう。欧米では、生まれた時から熱気球に乗って育った若いパイロットも多数いますが、日本にはいませんでした。そんな中、幼い頃から熱気球競技の世界で育った藤田雄大選手(23歳)が台頭してきました。雄大選手の父は、スカイスポーツのオリンピックといわれる「ワールド・エア・ゲーム」で優勝した経歴も持つ、世界トップクラスのプロ・バルーンリスト藤田昌彦選手です。雄大選手のチームは、父・昌彦氏と、母・さと子さん、友人の4人の構成となっています。

他の6チームの日本人パイロットは、54歳、49歳、48歳、44歳、41歳、36歳。いずれも海外での競技経験豊富な日本代表パイロットです。

しかし、今回ハンガリーでは、日本は惨敗となりました。

～強い!アメリカ勢...日本は惨敗～

世界選手権が始まる前、アメリカ合衆国世界選手権チームのインターネットサイト BalloonPongでは、このように各国を評価していました。

The usual power nations of Germany, France, Great Britain and the United States have a long history of good performances at the World Championships. Many teams are keeping an eye at some of the new nations on the international scene. Japan is sending seven pilots to this year, while Brazil, Sweden, and Spain are each sending five.

今回の世界選手権では、従来から行われているゴールに向かって正確に飛ぶ競

技と、近年始まった3Dタスクと呼ばれる競技が行われました。3Dタスクとは、各気球に搭載される航跡記録装置(GPSロガー)の結果から飛距離などを算出するものです。例えば、空中に三次元のエリアが設定され、その中をいかに長い距離飛行するか...といった内容となり、より複雑で高度なフライトテクニックと、3Dタスクをこなすための情報分析力が必要となります。

日本国内では3Dタスクの競技が少ないため、日本人パイロットは3Dタスクに慣れていません。また、各国の気球や競技車両を見ると、GPSや高度計、無線機は当然のこと、パソコン、動画カメラ、位置を知らせる発信機など、「熱気球」というノスタルジーさえ感じる外見とは異なり、ハイテクな機器が目白押しです。日本は、どちらかというと「高度計とGPSと無線機だけ」で競技をしている旧来型です。ゴールに向かって飛ぶ競技では、この方法でもパイロット個人の「技」と「センス」の勝負で上位に食い込めます。今回のハンガリー世界選手権でも、ゴールに向かうタスクでは日本勢も悪くはないポイントを稼ぐことができました。しかし、問題は3Dタスク。国としてチームを編成し、情報網を駆使する各国には到底及ばぬ結果となりました。

1位、2位はアメリカ合衆国、3位スイス、4位フランス、5位ドイツと強豪国がやはり上位を占めました。

日本勢は、16位、31位、42位、56位、69位、86位、105位。各パイロット、各チーム、がんばりました。しかし、パイロット個人のスキルで挑む、今の日本の体制の限界かもしれません。

日本チームの大きな特徴は、各パイロットを中心とするチームごとに競技を行っており、競技上では日本チーム全体の結束は弱いことです。世界選手権はあくまで各パイロットのテクニックを競うものであり、国同士の戦いではないとされます。しかし現実には、アメリカ、ドイツなど強豪各国は、

国としてチームを編成し、システムチックに世界選手権に挑んでいきます。

今回、圧倒的な強さを見せたアメリカ合衆国は、6人のパイロットを送り込んできました。若いパイロットが多く、そのパイロットをベテランがサポートする形でアメリカチーム全体が編成されています。アメリカチーム全体のチームマネージャー、その傘下に気象チーム、クルー、インターネットサイト BalloonPong を使ったの告知広報担当スタッフ、そしてスポンサー。「The U.S. Team」は完全に組織として機能していました。アメリカチームの場合、トップパイロットをより上位に上げるために、しばしば他のパイロットが「風見」として先に飛びます。各パイロットは、自分が優勝したいという思いもさることながら、何より星条旗を揚げたいという気持ちを強く抱いているようです。

こうした性格は国によって異なりますが、日本チームは、出場パイロットの数は世界有数となってきたものの、優勝できないの

には、このあたりに要因があるように感じます。特に近年3Dタスクのような新しい競技が増えたことは、組織力がモノを言います。他にも、熱気球は英語が公用語として進む競技のため、英語のスキルも必要です。日本人らしい性格からくるコンプレックス、スポンサーが少ないこと、選手の職場環境、富裕層ではない一般人が選手である所以の経済的事情なども、他国と比較しデメリットな点としてあげられるでしょう。

次回、世界選手権は2012年。アメリカ合衆国で開催されます。日本は、今回の結果から、シード枠は3となっています。2000年代初頭は、熱気球競技の世界トップクラスに入りつつあった日本も、今回の惨敗により急落してしまいました。

～世界選手権から帰国して～

世界選手権から帰国した私たちを待っていたのは、それぞれの日常生活と秋の気球大会。11月に佐賀で開催された日本選手

権、栃木で開催された「とちぎインターナショナル・チャンピオンシップ」。多くの選手・クルーは収入を得るための仕事と競技活動との間で、嵐の秋を疾走することになります。

私の所属するチームでは、一大事がありました。メインパイロットが、なんと失職してしまったのです。

ソフトバンクの孫正義氏は、Twitterで「夢さえあれば生きてゆける」と呟いています。ノーベル化学賞受賞の根岸英一教授は「夢は大きければ大きいほどいい。自分が好きなもので向いていることが何なのかを



9月28日 日本通運ブダペスト支店にて。熱気球は、藤で編まれたバスケットの中にナイロン製のバルーンや他の機材を詰め空輸する。コストを抑え確実な輸送、そして現地では機材一式とクルーを運ぶ車両が必要。

客観的にみきわめることが大切だ」と語っています。

幸いなことに私たちは、大空という夢をしっかり抱いています。

しかし、その夢の前には大きな壁がそびえています。ハンガリーへ行った私達チーム5名の帰国後は、失業保険、就職浪人、フリーター、自営業、会社員。これからの熱気球競技の活動そのものが、危ぶまれる事態となっています。「分相応の活動」という言葉と、夢との間で心は揺れます。しかし、あえて言いたい。「夢さえあれば生きてゆける」と。夢さえ忘れなければ、きっと何とかかなると。

～ブダペスト国際マラソン・

駅伝部門参加～

さて、前回もお話しましたが、なぜ盛田さんと出会うことになったのか。昨年末からのハンガリーに関するリサーチの過程で、ぼつりぼつりと印象深く盛田さんのお名前が浮き上がり、私の記憶に残っていました。ある

日、ハンガリー政府観光局のニュースレターで、私たちがブダペストに到着する翌日、ブダペスト国際マラソンが開催されることを知りました。これは楽しそうだ!チームみんなで参加しようという話に。私たちのチームは5人なので、せっかくだから駅伝部門に参加しよう(ちなみに陸上経験者はいません)。過去のデータを見ていたら、駅伝部門の上位チームにMorita Tsuneoというお名前が。

(!)この方は、あの、ハンガリーの情報でしばしば目にする、あの方にちがいない。今一度、ネットを探索し、盛田さんの個人のサイトを見つけ、エッセーなどを読み返し間違いないと確信を持ち、うれしくなって思わずメールを送りました。

そこから、盛田さんとの出会いはスタートしました。

面識もない私たちのために、マラソンのチェックインをしてくださり、当日は不慣れな私たちを終始アテンドしてくださいました。

本当にありがとうございました。

～おわりに～

いま、熱気球世界選手権の思い出よりも、なぜか楽しく美しく素晴らしい思い出として鮮明に残っているのは、ブダペスト国際マラソンの光景かもしれません。美しいブダペストの街を、ドナウ河に沿って走った、4区6キロ。

記念参加でエントリーしたブダペストマラソンの方が、長い時間かけ準備し、歯を食いしばり真剣に挑んだ熱気球世界選手権よりも楽しかった... というのは、象徴的な事柄なのかもしれません。本気で挑む事柄は、時折、辛く苦しい。だからといって、楽しいことばかり、楽なことばかりをしては、それは一時の快楽。本望ではないでしょう。来年の日本での熱気球競技シーズンは、春にスタートします。それまでにチームの体制を整え、リスタートを切りたいと思っています。

(かとう・しの 熱気球世界選手権 日本代表チーム)

20年振りの転倒

盛田 常夫

この10月と11月、続けざまに三度も膝の水を抜くはめになった。20年振りのことだ。忘れもしない1990年初夏のある日、経団連の視察団との夕食会を前に、マルギット島のテルマル・ホテルの温泉に浸かり、マッサージを受けた。左足に疲れが溜まり、膝の曲がりか鈍くなっていた。疲れると、膝に少しだけ水が溜まる。水泳やマッサージなどで疲労をとれば、数日で元通りになる。もちろん、水が溜まっている部位は強く触れないで、軽く滑らせるだけのマッサージが必要だ。ところが、マッサージ師に注意するのを忘れた。マッサージ台に上がった途端、いきなり曲がりきらない左足を、思い切って臀部まで押しつけられた。膝が「ググウー」という鈍い音をだした。「あー」と叫んだが、後の祭り。その場で痛みを感じたわけではないが、何かまずいことが起きたと直感した。

それから会場のグンデル・レストランに直行したが、視察団への30分ほどのレクチャーの間も、左膝の違和感が次第に強くなったのを覚えている。その夜は無事に家へ戻ったが、夜半から痛み出し、膝がみるみるうちに膨れ上がった。朝にはもう立って歩けなくなっていた。ハンガリーで持つべきものは医者友人。4戸入居しているアパートのお隣さんは私と同じ歳の泌尿器科の医師で、ハンガリー医学界で良く知られたロミッチ兄弟の弟イムレ(現、センメルワイス医科大学附属泌尿器科病院院長、兄のラースローは内科病院院長)で、奥さんも未熟児の専門医グウルベ・エーヴァ(現、ハンガリー未熟児学会会長)。床を這いながらドアを叩き、助けを求めた。奥さんの同級生に膝の専門医がいるというので、センメルワイス医科大学整形外科病院へ連れて行ってもらった。

膝の水を抜く

外科医なら誰でも膝の水を抜く程度のことではできらうと考える。ところがそう簡単ではない。この年、さらに2度も水が溜まり、ハンガリーと日本の病院で水を抜いて

もらったが、専門医と専門外の医者との違いを知るようになった。

最初の水抜きから2ヶ月ほど経って再び膝が腫れた。最初に世話になった医師は海外出張中で、仕方なくタクシーでヤーノシュ病院の救急病棟へ行った。2時間も待たされたあげく、一般外科医と思しき医者が膨れ上がった膝を見て、まず麻酔注射をし、それから浣腸のような太い大きな注射器を用意した。ところが、針を入れても、なかなか水を抜けない。針を動かして水が抜ける場所を探すが、結局、中途半端にしか抜けず、大げさにも石膏のギプスで左足全体を包んでしまった。待ち時間が長かったこともあって、治療を受けている最中から私はイライラし通して、家へ戻ってからハサミでギプスを断ち切った。

ハンガリーの外科医の名誉のために言っておけば、日本の武蔵野日赤病院でも大同小異の扱いを受けた。要するに、専門医でないと分からないことや、できないことが多いのだ。だから、医者を選ばないといけない。

最初に水を抜いてくれたハンガリーの専門医は、麻酔など使わず、小さな注射器で綺麗に水を抜いてくれた。水を抜くわけだから、ふつうの注射針より太い針を使う。針を残しながら、数回にわたって10~20cc程度の水を抜いていく。膝に針が入る一瞬は痛い、七転八倒する膝の痛みには比べれば何ともない。

餅は餅屋

医者と聞くとなんでも治せると思うが、現代医療は「赤髭先生」時代と違う。外科医に内科の手術はできないし、同じ外科と言っても、脳外科などは特殊な分野だ。整形外科医でも、専門とそうでない分野があるだろう。同じ専門でも腕利きの医者もいれば、そうでない医者もいる。風邪薬をもらう程度の病なら万(よろず)医者でも構わないが、専門知識や経験が必要な治療や手術には熟達した医者を探さなければならない。

私が野村総研の事務所を構えていた頃、

日本から訪問する客が、「今、トヨタの株を買うべきですかね」などと意見を聞いて来た。「証券セールスを担当しているわけではないので、分かりません」と答えていた。証券会社に所属している人なら、誰でも株の買い方を知っているだろうと思うのだろうか。証券会社の調査機関は大きく分けて、二つの専門家から構成されている。一つは産業セクターの動向や企業の株価の動向を調査しているアナリスト。これはミクロ経済の分析担当。もう一つは国や地域の経済を分析するエコノミスト。これはマクロ経済の分析担当。株価動向の分析などはアナリスト、為替や経済成長などの分析はエコノミストの仕事である。同じアナリストでも専門の産業分野がいくつか特定の分野を受け持っている。エコノミストも同じである。すべての産業セクターを担当している人や世界経済全体を担当している人はいない。

要するに、現代社会では仕事が細分化されて、もう「赤髭先生」の時代のように万の仕事をこなす人などいない。だから、何事においても、その筋の専門家を探すことが肝要なのだ。とくに医者は人の命にかかわることだから、間違った医師を選ぶと、治るものも治らない。

膝にも出る痛風炎症

膝に痛風の炎症がでると、バットで殴られたような痛みが出る。2~3日はとにかく痛みとの闘いになる。まだ30歳代の半ばの頃、膝に痛風の炎症がでて、医者に自己診断を告げたら、「そんなはずはない」と言われた。「痛風の炎症は足の親指に出るのがふつうだから」。これは教科書でしか学んだことのない医者の一つ覚えで、最近痛風研究が行き渡った所為か、勉強したことのある医者は理解を示すようになった。今では整形外科医も、痛風の炎症が併発している

痛風の炎症(尿酸結晶が関節に溜まって神経を圧迫して起こる炎症)が起きる前に、かならず前兆の異変を感じる。その時に、「コルヒチン」という強い薬を飲めば、不

思議と痛みの発症を避けることができる。しかし、いったん炎症が出ると、コルヒチンは効かなくなるばかり、腎臓に負担をかけるので避けた方がよいと言われている。しかし、ちょっと前まではそうではなかった。これも一昔前のことだが、アメリカの大学の研修セミナーに学生を引率した折、水上スキーに興じて足首を痛め、そこに痛風の炎症が出た。大学病院の医者が処方したのは、コルヒチンを3時間おきに大量服用するというものだった。実際のところ、炎症が出てからは痛み止めの薬を飲むしかない。鎮痛剤でもアスピリン系は避けた方がよいとも言われているが、強い痛み止めは副作用やアレルギーを起こすので難しい。とにかく、山を越えるまで、痛みに耐えるしかない。

20年前も今回も、膝に水が溜まり、そこに痛風を併発させた直接の原因はマッサージだった。マッサージのやり方で、治療になったり、障害を起こしたりする。しかし、それはあくまで直接的な原因で、膝の疲れや痛風症(高尿酸血症)のケアを怠ったのが原因だ。私の場合は食生活からではなく、遺伝的な要素によって惹き起こされるものだから、血中の尿酸値を低めるアルプリノールを服用する必要がある。薬を飲むのが嫌で、サボっていた付けが回ってきたのだ。

ハンガリーで医者にかかる

ハンガリーの病院は外来患者の受付システムが機能していないから、病院へ行くのは気が重い。こういう時は救急車を呼ぶという最後の手段がある。自分の足で救急病棟へ行ってはならない。救急車で運ばれた患者は優先して診察を受けられるが、自分で救急病棟へ行っても受付がないから、看護婦か医者にお金を掴ませない限り、いつ診察を受けられるか分からない。何時間でも放っておかれるから、コネがない限り、自分で行ってはならない。

今回はとにかく痛みの峠が過ぎるのを待った。症状が少し治まってから、インターネットで20年前の医師センドウルーイ・ミクローシュ教授を探した。現在、センメルワイス医科大学整形外科病院院長になっていることが分かった。しかし、すぐに大学病院へ行って診察を受けられるとは限らない。インターネットの情報から、センドウル

ーイ教授が12区のヘルスセンター・クリニックでも診察していることが分かった。週に一度、夕方からこのクリニックで診察している。電話で予約がとれた。

日本の健康保険制度に馴染んでいる我々が、ハンガリーの医療・保険制度や医療慣行を理解するのは難しい。国立病院では旧体制の残滓ともいえる古いシステムが機能していて、被保険者であれば無料で診察してくれるが、コネなしで病院へ行っても診察を受けるのは並大抵のことではない。なにせ、外来受付システムが機能していないので、どうやって自分の順番が回ってくるか見当もつかないからだ。ハンガリー人ですら、数時間待っても診察を受けられず家に戻る人もいるから、外人には至難の技だ。

旧体制の医療・保険システムが形だけ残され、多くの医者は病院の常勤医師ではなく、病院に請求書を発行して報酬を受ける。多くの医師が個人クリニック(合法・非合法)を保持しながら、非常勤勤務のような形で病院に勤めている。これで良い診療サービスが提供できるはずがない。たとえば、病院に勤務する産婦人科医は初診の患者にたいして、出産までのコントロールは自分のクリニックで行い、出産はまた病院でという具合に使い分けている。自分のクリニックでの診療は現金で決済されて医師の収入になる。病院勤務の報酬が低いので、このような変則的な慣行がまかり通っている。

個人クリニックをもたない医師は、ほとんどの国立病院の中に併設されたプライベート・クリニックでアルバイト診療を行う。たとえば、センメルワイス大学付属のすべての病院に、センメルワイス・ヘルスセンター(Kft.形態で大学所有)が開設されていて、そこでは保険外診療が行われている。通常の健康保険診療だと、手術に何ヶ月(手術によっては何年)も待機させられるが、ここへ行けばすぐにやってくれる。しかし、健康保険は一切利かない。

診療を受ける

センドウルーイ教授はセンメルワイス・ヘルスセンターのクリニックだけでなく、12区のキライ・ハーゴ通りにある国立

ヘルス・センター」というプライベート・クリニックにも週一で診療を行っている。

国立脊椎治療センターの入り口を進んだ奥に、立派なドアで仕切られた部分がある。Budai Egészségközpont と名付けられたドアを空けると、2名のアシスタントが受付・診断書作成・経理を担当し、その周辺の6室が診察室になっている。ここはあくまで簡単な診療をするだけで、手術は後日、国立病院の施設を借りて行うことになる。何とも歪んだシステムである。インターネットで見ると、この種の保険外クリニックは雨後の竹の子のように生まれていて、それぞれが価格表と称した診療費請求額を公示している。ハンガリーの公的医療保険には入っている人は「割引」しますと書いているところが多い。ちなみに、膝の水を抜く診療費は初診料を含めて、割引金額で26000Ftだった。領収書をくれるから、民間の医療保険に入っている人なら還付請求できるが、一般のハンガリー市民には縁遠いシステムである。

膝の痛みが消えるのであれば、お金の問題ではないが、毎月、高い健康保険料を払っていても、緊急治療に健康保険が役に立たないのは空しい。久し振りに会うセンドウルーイ教授はさすがに風貌が変わっていたが、昔の面影は残っていた。もちろん、20年前のことなど覚えているはずもない。簡単な洗い場に通りの注射器だけは整っていた。何回か膝から水(粘液)を抜き、最後は注射器を抜いて、膝周辺を絞って注射針から最後の一滴を絞り出す。とはいっても、完全に水を抜くことはできないが、50~70CC程度の水が抜ける。その後、少量のステロイド剤を注入して、治療は終わる。インターネットで教授を探したことや、20年前の話などした。教授は電話で受付のアシスタントに診断書の内容を口述し、受付でお金を払い、診断書をもって一件着となる。

このプライベート・クリニックでも、設備面からみれば、日本の標準的な診療サービス以下だが、いったいこれからハンガリーの医療・保険体制はどうやって改革ができるのだろうか。現在のアナーキーな医療体制の改革は並大抵の努力で済まないことだけは確かだ。

留学生自己紹介

愛おしさがきっかけに

バラシ・インスティテュート

粟村 岬

ハンガリーという国が自分の生活の一部を占めるようになって7年半が経ちました。その割合は時期によって大きくなったり小さくなったりしていますが、今も変わらずこの国を愛おしいと思う気持ちは健在です。旧大阪外国語大学(現:大阪大学)の日本語専攻に入学し、日本語学を専門としながらも、当時の大学のシステム上、外国語を一つ選んで専門的に勉強する機会をいただき、とくに強い思い入れもないまま選んだ言語がハンガリー語でした。きっかけはともあれ、一度学び始めると、この特異だけれど温かみがあり、柔軟性に富み、幅広い表現力をもつハンガリー語の魅力に心を奪われました。

日本語学の勉強もそこそこに、2004年夏の2カ月弱の短期留学を経て、2005年の夏、1年のハンガリー留学を決めました。ハンガリー語を勉強すればするほど、その言葉の魅力が深く感じられ、またその言葉を使って自分自身がいろいろな人とコミュニケーションを取れていることに、強い喜びを感じるようになりました。勉強をこんなに楽しいと感じたのは、今までの人生で初めての経験かもしれません。

ハンガリー語の学習と同時に、留學生生活の大きな割合を占めていたのが、ハンガリー人日本語学習者に日本語を教えることでした。高校の日本語の授業にボランティアでサポートをしに行ったり、剣道や空手のトレーニングに通う学生にプライベートで日本語を教えたり、友人の経営する日本語塾で教えたりと、日本語を教える多くの機会に恵まれた一年間でした。普段何気なく使っている母語の日本語ですが、教えてみて初めて気付く日本語の難しさや、美しさ、多様さなど、日々発見と勉強の連続で、とても新鮮で貴重な時間を過ごせました。帰国後に専門である日本語学の研究としっかり向き合えたのも、ここで日本語を教えることで日本語がどういう言語なのか見つめなおす

機会になったからだと思います。

また、自分自身が外国語を学習し、教える立場にもなることで、外国語学習の意味も考えるようになりました。自分がハンガリー語を話した時のハンガリー人の嬉しそうな反応や、日本のことを自分の言葉でちゃんと伝えられる喜びは、ハンガリー語を習得する最大の動機になりました。また、自分の教えた単語や表現を使い嬉々として会話してくれる教え子達や、文化交流の一環で教えた「あやとり」で、いつまでもいつまでも楽しそうに遊んでいる日本語塾の生徒たちの姿を見たときは、これ以上の喜びはないと感じました。言語というコミュニケーションの道具を使うことで、人種も育った環境も違う人同士が、こんなにも近い存在になれるということにとっても感動し、外国語学習の素晴らしさを強く実感しました。言語を勉強するということは、単なる教科の勉強ではなく、人と人とのコミュニケーションの可能性を広げることなのだと感じ、言語の学習を通じて人との関わり合い方やコミュニケーションのあり方について深く考えるようになりました。私の言語学習への強いモチベーションは、すべてここに繋がっています。

日本に帰り、大学を卒業して一般企業に就職してからも、ここで学んだことや感動したこと、出逢ったたくさんの温かな人たち、そして記憶から消えることのないドナウ河の美しい風景に、何度も何度もこの国を思い出し、励まされ、ハンガリーは自分にとってかけがえのない存在となりました。そして現在、呼び戻されるようにまたこの国へと帰ってきた今、再び語学学校へ通ってハンガリー語の勉強を進めながら、日本語学習者に日本語を教える生活を送っています。この国でこの先、自分に何が出来るかはまだわからないけれど、自分と向き合い、この国と向き合って、人とのコミュニケーションを大切にしながら、少しずつつなぐ進めたいと思います。

今しかできないことを

リスト音楽院ピアノ科

松永 みなみ



私は2008年9月より、ここハンガリーでピアノを学んでいます。気がつけばもうここでの生活も早3年目を迎えました。大学4年生の時に、当時師事していた先生から

の薦めで、岐阜でのリスト音楽院マスターコースを受講したことが留学のきっかけでした。先生も、今の私と同じ年代の時にハンガリーに3年半留学していたこともあり、こちらの先生のレッスンは是非お薦めだから、という理由からでした。

就職するのか、大学院に行くのか、それとも留学するのかという3つの選択肢でずっと悩んでいた私は、何かしらのきっかけになればという何気ない気持ちで留学選考会に挑戦することにしました。当時、就職試験に合格していたこともあり、岐阜での留学選考会に合格した時には、正直な気持ち「どうしよう、合格してしまった・・・」というのが一番にあり、すぐには留学を決断できませんでした。それから3カ月ほどたった時、現在師事しているナードル先生のレッスンを受ける機会がありました。私が大学に入った時から、毎年ナードル先生が来日されるたびにレッスンを受けており、その当時より先生の情熱的なレッスンが大変気に入っていました。そこで先生に「実は、リスト音楽院の留学試験に合格したのです」と伝えたと、「僕のクラスに是非おいで。9月にまた会おう。待っているからね」と言ってくださいました。不思議と、先生の一言によって一瞬のうちに留学を決意することができ、そして家族や周りの人たちからも「今しかできないことを」と言われ最終的な決断にいたりしました。

しかし、いざ決断してみたものの、日本とのレッスンのペースの違いを先輩留学生から聞いていたこともあり、自分にこなせるの

かという不安がありました。私が通っていた大学の試験は大きいもの、小さいものを含めて年4回、当時の私は、その試験ために曲を練習して本番にのぞむ、という単純計算しても年4曲にしか取り組んでいませんでした。しかし、ここでのレッスンはそういうわけにはいきません。2、3回のレッスンで1曲を仕上げるペースなのです。譜読みの遅い私にとって、このペースはとってとても過酷でした。しかし人間、どんな状況にも慣れることができるものなのです!1年目はとにかく曲をこなすのに必死で、自分が解決しなければならぬ問題点や課題について考える余裕が1ミリもなく、ただ曲をこなしていただけだったのに対し、2年目になると、だんだん要領もわかってきたのか、いろんなことを考える余裕ができ、こう弾きたい、こういう音を出したいと思えるようになってきました。

ここハンガリーではたくさんの音楽に触れる機会が多いこともその理由のひとつだと思います。というのも、私の地元ではプロのコンサートへ行こうと思うと、最低でもチケットは2500円。ですが、ここハンガリーでは学校内でのコンサートには無料で入れますし、(残念ながら現在は改装中のため学校でのコンサートはありませんが・・・)、ムパでのコンサートは学生300フォロントで聴くことができます。1年目、2年目は無料で入れる学校へのコンサートへ、ほぼ毎日のように足を運びました。そして、日本ではテレビでしか見たことがなかったオペラにも月2、3回の割合で通いました。いろいろな種類の音楽、ピアノ以外の楽器のコンサートを聴くことにより、自分の耳もこえて、結果的に「こう弾きたい」というところへつながってきたのだと思います。3年目の今は、いろいろなことを考えることができるようになった分、自分への課題も次から次へと生まれてきます。課題が見えなくなったとき、その時はピアニストとしての私が終わるときなのだと思います。将来、自分の人生を振り返ることがあった時、ここでの留學生生活は時間的にみるとほんの一瞬でしかないと思いますが、内容的には最も濃い日々を送ったと胸を張って言えるように、残り少ない留學生生活を、精一杯がんばりたいと思います。

リスト音楽院日本人留學生卒業(ディプロマ)コンサート

今年度も名門リスト音楽院を卒業されるに当たって卒業コンサートが行われます。

※現在決まっている詳細のみ掲載させていただきますが、次号では確実な詳細をお知らせすることができると思います。是非会場へお越しください。基本的にチケットのようなものはなく入場無料となっております。

菊地 玲子さん(大学院ピアノ科)

2011年5月18日 16:00開演

会場:旧リスト音楽院ホール

プログラム:バッハ:フランス組曲第6番

BWV817

ベートヴェン:ピアノソナタ

Op.57 f-moll

バルトーク:ルーマニア民俗舞曲 ほか



山田 真理子さん(大学院ピアノ科)

2011年5月19日(木) 19:00より

会場:旧リスト音楽院ホール 入場無料

プログラム:マルチェロ=バッハ:協奏曲 ニ短調 BWV974

ラフマニノフ:楽興の時 Op.16

ショパン:前奏曲 Op.28

大迫 綾香 (大学院ヴァイオリン科)

2011年5月20日(金) 会場:Obudai Tarsaskor

プログラム:J.S.バッハ:無伴奏ヴァイオリンソナタ

第3番 BWV1005よりAdagio,Fuga

ドホナーニ:ヴァイオリンソナタ op.21

(ピアノ:岩崎 由佳)

メンデルスゾーン:ヴァイオリン協奏曲ホ短調

op.64(ソリスト:大迫 綾香)

ハイドン:チェロコンチェルト 1番

(ソリスト:星野 智也)

共演:ブダベスト弦楽合奏団



安田 恵子(大学院ピアノ科)

日時:2011年5月11日水曜日 16:00開演

場所:旧リスト音楽院室内楽ホール

プログラム:ベートーベン:ピアノソナタ No.27 Op.90

ラフマニノフ:コレリリの主題による変奏曲 Op.42

リスト:ピアノソナタ ロ短調

「第三文化の子供たち」の日本語教育

高木 典子

現在8歳の娘と7歳の息子が緑の丘補習校で日本語を学んでいます。

子供たちの父親はクロアチア系オーストラリア人です。様々な事情で子供たちは家の中では英語とちよこっと日本語、学校ではフランス語、そしてザグレヴのおばあちゃんが来るとちよこっとクロ

アチア語と、かなりややこしくなっています。親の仕事の都合でハンガリーに来る前もフランス・タンザニアなどを転々と私たちですが、2年前オーストラリア

に帰省した際、私の娘が誰かに「どこから来たの?」と聞かれ自信満々にこう答えるのを聞きました。

「私は半分日本人、半分オーストラリア人、半分クロアチア人、半分タンザニアで、あとの半分はフランスなの。」

「第三文化の子供たち」という言葉があります。親の仕事などで世界各地を転々とし、自分たちの本来の母国(つまり第一文化)への帰属意識は薄く、色々な国での生活(第二文化)を重ねる結果自分の中で、そして同じように育った子供たちの間で、特定の文化に属さない第三の文化に属する、またはそれを自ら作り

上げる子供たちのことです。「ノーマッド・キッズ」、「グローバル・キッズ」と呼ばれ、誰とでもすぐ友達になれる、異文化間のコミュニケーションがうまい、といったポジティブな面を多く持ちます。でも彼らなりにつらいことも多いのです。特定の文化の中で育ったのではないので、人生の中で最低一度は「自分はいったい誰なんだ?」と思うことがあり、この質問をうまく自分で乗り切れなかった場合、人間不信に陥ったり、鬱になってしまうこともあるそうです。

恐るべきことに、私の娘はもう6歳の時点で自分が「第三文化の子供」であることを自覚していたのです。自分のアイデンティティについて深く考える年齢ではないと親の私たちが思っている、彼ら自身はもう色々考えているんです。自分たちにとっての「母国語」についてもそうです。

上に記したとおり私の子供たちは特定の母国語を持っていません。家庭では英語が公式語で、子供たちにとって日本語は「お母さんの国の言葉」です。まさしく「母国語」なのですが…。その肝心の

母親があまり日本語を話さない、その上仕事や出張で補習校の宿題もあまり見てあげられない、と日本語教育面ではまったくのダメ母です。事実、母親自体も日本文化への帰属意識が低い「第三文化」の母親になってしまっています。こういう状況での日本語教育は子供たちにとっても親にとっても、重要である反面、大きなチャレンジとなっています。そんな私たちを根気強く、温かく見守ってくださる補習校の先生方には大変感謝しています。

みどりの丘日本語補習校

特定の文化・言語に属さない「第三文化」に属する子供たちが唯一帰属できる場所は家族です。その家族のメンバー(たとえば両親)が属する文化がいわゆる

第一文化です。我が家の場合、その家族自体も日本・オーストラリア・クロアチアと三つの文化・言語に分かれています。その中にそれぞれおじいちゃんおばあちゃん、叔父と叔母、そして従弟たちが

います。たとえ私の子供たちがこの三つの文化のいずれかに完全に属さなくとも、一つ一つの文化とのつながりは持ち続けてほしいのです。私にとって、子供たちが日本語を勉強するという事は、日本にいる家族との絆を保つこと、すなわち彼らの第一文化三分の一への絆を保つことなのです。

私の息子は9月に補習校に入学して、最近やっとひらがなとカタカナが読めるようになったのですが、先日電話で日本のおじいちゃん・おばあちゃんに誕生日のプレゼントのお礼をちゃんと言っていました。娘のフレンチスクールの担任の先生からは、クラスメート全員の名前を日本語で書いて配って好評だったと聞きました。彼らなりに日本語を使う姿を見るたびに、マイペースでいいから、ちよこっとずつでいいから、日本語を学び続けてほしいと願っています。

今年も我が家は年末から正月にかけて私の横浜の実家へ帰省します。2週間という短い期間ですが、私たち家族にとって日本で家族・親戚との絆を深め、日本文化に触れる貴重な機会です。欧米とはまったく違う日本でのクリスマスや、本場で見る「ポケモン」やウルトラマン、メニューがちょっと違う日本のマクドナルド、紅白歌合戦、山の中の温泉宿、渋谷駅前の大交差点、どれもみんな彼らの第一文化三分の一です。そして日本語をもっと勉強しようというやる気につながればと願っています。もちろん、補習校の宿題も忘れずに…。

運動部サークル情報

2011年のゴルフシーズンを迎えるにあたって

ハンガリー・日本人ゴルフ部

副代表 宮崎 好文

2011年の新春にあたり、例年の如く3月の第1回日本人ゴルフ部月例会の開催が待ち遠しい限りですが、今一度冷静に少し2010年度を振り返って見ます。1月23日(日)に「大吉」にて32名の会員参加の下、恒例の新年会兼新HDCP決定委員会が開催され、①2009年度のレビュー、②帰任者の挨拶、③2010年度新世話役の承認、④2010年度新HDCPの承認、⑤その他提案事項の審議などの案件が議論されました。酔いのせいもあり白熱した議論の中で、特に④の新HDCPの決定には何時もながら時間を費やし、20名の会員の新HDCPが上方修正されると言う一幕もありました。この慣習は2011年度からは廃止しようという意見が新年会終了後早々に挙がっていたので、本年度の新年会を大いに楽しみにしています。

春になり、長らく待ち侘びていました第1回日本人ゴルフ部月例会が予定通り3月28日(日)に開催され、激戦の火蓋が切られ11月7日(日)開催の第9回最終月例会まで大いに楽しんだ1年でした。昨年は新世話役の積極的な活動のお陰で様々なイベントがありましたので、順次ご紹介します。5月から7月にかけて第12回「大吉杯」マッチプレーゴルフ選手権春季大会(優勝:成沢選手、準優勝:岡崎選手)、続いて9月から11月にかけて第13回同秋季大会(優勝:柿崎選手、準優勝:成沢選手)が行われ、参加された皆様は日頃の月例会とは違った緊張感を味わわれた事と思います。また、第12回大会では岡崎選手の2連覇、第13回大会では成沢選手の2連覇が懸かっていましたが、如何にマッチプレーでの2連覇が難しいかが伺われたかと思います。第14回大会では是非とも柿崎選手にこの難関にチャレンジして頂きたいと思っています。梅雨の無いハンガリーの6月13日(日)にパノニアワールドカップが開催され、日本、ハンガリー、ドイツ、フランス、オーストリー、アイルランド、アメリカの7ヶ国が参戦し、日本

は最多の3チームを配し、2連覇を狙いましたが、残念ながら地元ハンガリーチームにその夢をもの見事に砕かれてしまいました。本大会には、2連覇を達成して1週間後の20日(日)に開催の第6回4ヶ国対抗親善ゴルフ大会(開催国:ハンガリー)での優勝を目指すと言う大きな目標がありました。しかしながら、大会当日、地元の利を活かして参加者全員全力を注ぎましたが、スロバキアの2連覇は阻止したものの、チェコの隠された実力には脱帽でした。本件深く反省しております。

その他にも、昨年は多彩なアイデア的イベントがあり、大会の発端そのものは某居酒屋で生まれたと伝え聞いていますが、7月4日(日)に第1回日本人ゴルフ部年代別対抗戦が開催されました。年代は、①20~30歳代、②40歳代、③50歳代、④60歳代の4世代に分け、使用出来るクラブは①②③世代は5本(パターを含む)、④世代は敬意を表して6本と限定されました。その他、各ニアピンやドラコンも最終得点に加味するというユニークなルールで行われ、大方の戦前の予想では、圧倒的に豊富な人材を有する60歳代が有利と報じられていましたが、実際に蓋を開けてしまうと圧倒的強さを示した50歳代(成沢選手、陸川選手、栗原選手、筆者)が初優勝を遂げました。10月24日(日)には、ブダベスト市内にあります「HIGHLAND GOLF CLUB」と協賛で「1st. Japanese Business Golf Championship」が開催され、12名の会員参加の下、日頃とは違ったゴルフコースでステイブルフォールド方式でのプレーを楽しみました。そして、昨年の締めくくりは、数々のドラマが生まれたマッチプレー選手権の表彰式を兼ねた日本人ゴルフ部忘年会でした。本会には偶然にも一昨年と同じ19名の参加の下、時間の経つのも忘れ、ドンペリと高級焼酎(某代表からの差し入れです)に酔いしれ、某店主の寛大な取り計らいで激動の1年が何とか終わりました。これは、ひとえに、会員皆様のゴルフに対する深いご理解とご協力こそがこの結果を生んだものと大変喜んでいますが同時に心から感謝しています。本年度も当ゴルフ部の活動を会員皆様のご協力の下、陰ながら支えていく所存でありますので、本年も引き続き宜しくお願いしてペンを擱きます。



スポーツ行事・運動サークル情報

テニス部

① 2010年活動報告

- ・ペアマッチ(4月)
土曜・日曜のメンバーが集まり、それぞれペアを組み、予選リーグ・決勝トーナメントにて試合。試合後、親睦会を開催。
- ・送別テニス会(10月)
帰任者の送別テニス大会を開催。ペアを順次入れ替え、最終各個人のポイントにて順位決め。優勝者には「おやじ」称号が与えられた。試合後は、送別会を開催。

② 2011年活動方針

土曜&日曜テニスの交流を深めテニスライフを楽しむ!
計画:ペアマッチ・BBQ・練習会の開催。
今までお互い行き来する機会があまり無かったので、各チーム主催のイベントを開催し、交流を深めていきます。

メンバー募集中♪

1. 土曜チーム
男性:9名、女性:1名
場所:ヴァーロシュマヨールテニスコート
時間:毎週土曜日15:00~18:00(3時間)
代表:杉本 mailto:arpad1162@yahoo.co.jp
2. 日曜チーム
男性:10名、女性:2名
場所:マッチポイントテニスコート
時間:毎週日曜日9:00~11:00(2時間)
代表:的場 h-matoba@exedy.com

バドミントン部

① 現在の部員数

大人:15名
子供:6名(小学生)

② 活動場所と時間帯

日時 毎週日曜日の午後4時から2時間
場所 中学校体育館(ブダペスト2区、Kokeny u. 44.)

③ 2011年の活動計画

ウィーン日本人バドミントンクラブとの交流会(不定期)

④ 代表の方の名前と連絡先

及び入部又は問合せの際の渉外の方の名前と連絡先
代表 升谷(ますたに)
問合せ先 hujpbad@gmail.com

ランニング情報

2011年のレース情報

- 4月10日 Vivicitta 従来の6km、12kmに加え、
ハーフマラソンが新登場
4月17日 ウィーン・マラソン/ハーフマラソン大会
(児童用の4.2km、幼児用1km)
5月15日 K&H マラソンリレー、ハーフマラソンリレー、
ジュニアリレー
6月 5日 or 8日 ドナウ河沿い沿岸道路 10km、5km競争
9月 4日 ブダペスト国際ハーフマラソン大会
10月 2日 ブダペスト国際マラソン大会
10月16日 秋の女子レース

参加の申し込みは、日本人学校野田教諭宛か、
morita.magyar@gmail.com の盛田まで。

編集部よりのお知らせ

「ドナウの四季」のHPが完成しました。これまで掲載されたすべての原稿を読むことができます。 <http://www.danube4seasons.com>

皆様の原稿をお待ちしています。エッセイ、ハンガリー履歴書、自己紹介、サークル紹介などの記事をお寄せください。提出いただいた原稿は、紙面統一の編集のために修正することがあります。修正した原稿は執筆者の校正をお願いしています。

原稿は電子ファイルで、morita.magyar@gmail.comへお送りください。Word文書あるいは一太郎文書でお願いします。EXCEL形式での提出はお控えください。写真および図形は別ファイルで送付ください。



白組~がんばるぞ~!

竹内 更

今日は、待ちに待った運動会だ。「今までの練習の成果を見せてやる！」私はそう思っていた。

「はい!みなさんごつちだよー。」
西おか先生の声が聞こえた。いよいよ運動会が始まる。私が一番楽しみにしているのは「stand up ~心をひとつに~」。去年、組体そうをしているのを見て、「すごい!あれが全て人間だなんて!」と感心した。だから、今年は、一・二・三年生や、お母さん、お父さんなどに、そ

う思わせたい。「動」で一生けん命おどり、「静」できれいに、波やドミノをして、いよいよ「躍」。「ヒラミットは成功するだろうか。」だんだんきんちょうしはじめた。四番目。私のがのる番だ。私はのつた。

「ドン。」
倫平君がのり、立ち上がった。
「パチパチパチパチパチパチパチパチ」
拍手が起こった。「やった。成功した!」私は、心の中で、そう思った。きっと、見ている人たちは感心してくれただろう。
初めての組体そうだったけれど、上手にできて良かった。みんなの心が一つになった時だった。

ハンガリーのみなさん

Köszönöm szépen

安島 昇

19km過ぎ12時の教会の鐘の音を聞いてから、突然両足に激痛が襲ってきた。昨年の経験からすると、当然予想はできていた。昨年は、確か18km過ぎから走れなくなった記憶がある。どうやら、私の両足は限界が2時間のようである。昨年も、12時の教会の鐘の音を聞いてから、足は激痛で走れなくなった。出発が10時であるから、昨年の18km、今年の19km地点は出発から2時間経過したことになる。

今回も、マラソン道に反するように、ほとんど練習なしに挑戦した。書から、再三、練習していないのならハーフマラソンには出場しないように言われた。しかし、自分の目標とした「ハーフマラソン3年間完走」、「3つのメダル獲得」のためには、どうしても出場しゴールしたかった。19km過ぎからは歩くにも辛いので、給水所でもらった2つのコップの中の水を両足にかけながら走った。すると、激痛は一時消え、再び走ることができた。しかし、それはほんの数メートルしか効果はなかった。もう、諦めようとしていたとき、肩を叩きながら声をかけてくれる人がいた。「ジェルク(Gyerunk)」（日本語でがんばれの意味である）そういえば、それまでに何人かの人に、同じように声をかけて

もらっていた。今回は、背中に「MAGYARORSZÁG（ハンガリー）」の文字が入ったシャツを着て走った。それは、ハンガリーが好きであり、ハンガリー人になり切つて走りたかったためである。声をかけて追い越していった人が振り返り、日本人と解つても笑顔で走っていく。

折り返しまでは、余裕で「Köszönöm」と余裕で答えていたが、19km過ぎからは、返事するのがやつとの状態である。さらに両足の痛みがひどくなり立ち止まっていると、再び何人もの人に「Gyerunk」と声をかけてもらった。マラソンは自分との戦いと言われるが、今回は違うと思った。一人じゃない、励ましてくれるハンガリーの人がたくさんいる。「Gyerunk」に答えたい。その一心で、再び一歩一歩と踏み出していった。「英雄広場」を過ぎると、ゴールは間近、もう立ち止まれない。みんなの声援が自分を励ましているように感じる。そして、感激のゴール。2時間20分8秒、目標の2時間以内にはほど遠い時間だったが、3年間では一番速いタイムだった。ゴールに辿り着けたのは、ハンガリーの人たちからの「Gyerunk」の後押ししか考えられない。「Gyerunk」と声をかけて、

励ましてくれたハンガリーの多くの皆さんに感謝したい。あの言葉がなければ、棄権していたことは間違いない。

3年後に、もう一度ブダペストナイキハーフマラソンに挑戦したい。それは、優しいハンガリーの人々と再会するためと、ブダペストの風を感じながら鎖橋や自由橋を納得のいくように走りたいためである。



満喫した南アフリカW杯

盛田 常夫

2010年W杯は楽しめた。日本チームが活躍するとしないとでは、観戦の力の入り方が違う。しかも、予選リーグ敗退予想を覆して、「予期せぬ活躍」を見せたから尚更だ。前回のドイツ大会では初戦の豪州戦で、終盤に守備が崩れ、ドタバタ状態で逆転負けしてから、その後の試合を観る興味を失ってしまった。あの脱力感は今も記憶に残っている。

大会前の親善ゲームで散々な状態だったから、日本チームにまったく期待していなかった。とにかく「馬鹿負け」だけはして欲しくないというのが本音だった。世界ランキングが日本より低いハンガリーでさえ、日本チームをまったくリスペクトしていない。これで大敗などしたら永遠に日本は見下される。今でこそ低迷しているが、1950年代から1960年代にかけてのハンガリーは世界のトップチームだった。各種のナショナルチームの対戦で、日本はハンガリーに勝ったことがない。日本にプロリーグがあることすら知らない人がほとんどだ。カメルーンに勝った後ですら、「日本の選手はプロなのか」と聞かれる始末だから、日本、いやアジアのチームなどハンガリーにおいてすら問題外なのである。

私が毎日通っているヘリア・ホテルのフィットネス・クラブには、五輪メダリストがたくさん通っている。話題は常に各種スポーツ。「日本は守ってばかりで、攻めない」という人が多い。日本にとって最初のW杯(1998年)だったフランス大会の時も良く言われた。「パスを繋ぐのはうまいが、攻めて点を取らないと勝てないのだよ」と。ジャマイカとの消化試合で中山ゴンが1点取ったが、その程度で日本の印象は変わらない。

2002年の日韓大会の初戦のベルギー戦も、前半はフランス大会の延長のようだった。ハンガリーのコメンテーターは、「攻めない日本に勝ち目はなし」と定見を披露していた。しかし、後半になってゲームが急展開した。鈴木隆行が果敢に相手ボールを奪ってゴールを決めてから激しい点の取り合いになった。これで日本チームが吹っ切れた。さすがにハンガリーのコメンテーターも後半の攻防を高く評価せざるをえなかった。この後、日本はロシアとチェニジアに勝ちリーグ戦を突破したが、鈴木隆行のあの一発はフランス大会から続いていた日本チームのモヤモヤを吹っ切る歴史的なゴールだった。

しかし、如何せん、続くドイツ大会の対豪州戦が日韓大会の成果を帳消しにしてしまった。為す術もなくあつという間に3点を献上してしまい、「やっぱりアジアは弱い」、「日韓大会の韓国は審判にアシストされ、日本はホームの利を生かしただけ」という評価に逆戻りしてしまった。

デンマーク戦前、ハンガリーのコメンテーターは「日本はオランダ戦のように、守りに守ってカウンターに賭けるだろう」というもの

だった。しかし、戦前の予想に反して、前半に本田と遠藤の二本のフリーキックを決めた日本は、デンマークを圧倒する攻撃で会心の勝利を得た。この日の日本チームは最高のコンディションにあった。それに運まで味方した。二本続けて難しいフリーキックが決まる確率はどれほどだろうか。百回トライしても数回しかないだろう。それがドンピシャで決まった。個人競技でも団体競技でも、「何をやってもうまく決まる」時がある。それは最高のコンディションに、運まで味方する状態なのだが、まさに対デンマーク戦の日本はその典型だった。

フィットネス・クラブの友人たちも、「あの2本は今時のW杯でもっとも美しいフリーキックだった」と賞賛してくれた。本田のゴールを「たまたま」と強弁するTVゲストもいたが、別のコメンテーターが「本田は欧州CL(チャンピオンズ・リーグ)でも同じキックを成功させている」と即座に反論していたのが印象的だった。この2本のキックは日本のW杯歴史に残るゴールだろう。ドイツ大会で地に落ちた日本の評価を引き上げるのに十分な二発だった。

役割がはっきりしていて、日頃から戦術練習を行っているクラブチームと違って、ナショナルチームの息の合わせ方は難しい。今時のW杯でアフリカのチームの多くが一次リーグで敗退したが、とくに世界的なスター選手がいる国は予想外にもろかった。チームとしての成熟度が大きく勝負を左右した。ドイツ大会の日本チームも中田とそれ以外の選手との組織的な意思疎通や連携が不足していたが、監督がそれを統率することもできなかった。今大会では最初から期待されていなかった日本チームが、個を捨てて組織に賭けたことで道が開けた。「瓢箪から駒」のような展開で日本は一次リーグを突破した。

ベスト4に進んだチームと比較すると、日本の課題が見えてくる。最大の違いは、攻撃の厚み。今の日本チームはチャンスの時の波状攻撃ができない。パワーとスピードのあるFWが欲しい。だから、せめてパラグアイ戦の延長時間帯は玉田でなくて、森本を試してもらいたかった。一次リーグを突破した岡田監督を誰も批判しなくなったが、あの交代枠はベテランの玉田ではなく、フレッシュな森本を使ってもらいたいと思った人は多いだろう。練習パートナーでしか帯同できなかった香川真司の過小評価も悔やまれるところか。結果論かもしれないが、連日8万人もの地元大観衆を前にドルトムンドで大活躍している香川を見ると、愚痴の一つも言いたくなる。

それはそれとして、南アフリカW杯は楽しませてもらった。W杯後、本田に続いて、香川や長友がドイツとイタリアの本場で活躍しているのは心強い。彼らの活躍もあって、今までそれほど評価されていなかったJリーグの実力が見直されている。私個人の最大の収穫は、ヘリア・ホテルのフィットネス・クラブの友人たちに余計な言い訳をしなくて済むことだ。



7月10日に2年目を迎えた在留邦人向けマガジン『ドナウの四季』のホームコンサートを兼ねたパーティーが行われました。会場となったのは、このマガジンの編集長でもある盛田さんの事務所。事務所といってもブダ側の丘に面していて、ベランダから見ると風景はブダペストのパノラマ絶景。白で統一されている会場にもなった広いリビングは、まるでキャンバスに描かれた絵のように絶景を引き立たせるものでした。そんな絶景を背景に、素晴らしいコンサートプログラム、そしてゲストの皆さんで持ち寄った美味しいお料理で目・耳・舌で大いに、そして贅沢に楽しませて頂きました。

コンサートは2部構成になっていて前半はリスト音楽院留学生やハンガリー在住の音楽家達が、日ごろから耳にした事のあるような曲を披露してくれました。ソロピアノ、4手ピアノ連弾、オーボエ、ヴァイオリン、フルート2重奏とヴァリエーションに飛んでいて華やかでした。後半は、ハンガリー国立オーケストラのメンバーであるヴァイオリン奏者とチェロ奏者、そして歌の2人加わって更に本格的なレベルの高い演奏が聴けました。演奏者のそれぞれが楽しんで演奏されているので、聴いているこちらでもリラックスして奏でられる素敵な音へ引き込まれていきました。最後はみんなで「夏の思い出」を全員合唱しました。ハンガリー人ゲストも一緒に歌えますよう、日本語の歌詞をハンガリー語のアルファベットで読めるようにプログラムに載せてあったので、ハンガリー人もそのハンガリー語表記を見ながら歌ってくれていて、それを聴いた時は「ここにもハンガリー人と通じ合えるものがあるなあ」と嬉しくなりました。

コンサートの後は演奏家も、いらっしゃってくださったゲストの皆さん、そして関係者全員で持ち寄った美味しいお食事をいただきました。並べられていたのは日本の

お料理もハンガリー料理もあり、嬉しいことにデザートにケーキやクッキーなども揃ってあって、日頃このような豪華なご飯にありつける事ありませんので、たくさん頂くことができましたし、帰りにはお土産にとお持ち帰りまで頂いて帰りました。普段お会いしない方々ともお話もできまして、本当に貴重な一瞬を過ごすことができました。

今回コンサート出演者を留学生や演奏家の方に声をかけさせていただいたのですが、なかなか人前で演奏する機会が持てないので、こういった場面で機会を頂けるのは演奏家にとってやりがいもあるし光栄な事です。次回のコンサートにブダペスト在住の皆さんのご来場をお待ちしています。良いコンサートになりますよう幅広く演奏家の方々に声をかけさせていただきます(桑名一恵)。

ホームコンサート出演者から一言

町田 百合絵さん(ピアノ)

ブダペストを一望出来る素敵な大豪邸でのコンサート、音楽家なら誰もが羨むことだと思います。ホームコンサートならではのお客様との一体感を感じ緊張しつつも、とても楽しく演奏させて頂き、他の様々なアンサンブルを聴けた事も良い勉強になりました。そしてお楽しみ!演奏会後の豪華なお食事会。美しい夜景を楽しみながら、皆さんが持ち寄った美味しい和食、ハンガリー料理、デザート、お酒をいただき、至福のときを過ごさせて頂きました。その際、お客さんと沢山お話出来た事も貴重な機会でした。ハンガリーでの本当に素敵な思い出をどうも有難うございました。

岩瀬 桐子さん(フルート)

私は初めて盛田さんの事務所にお伺いしましたが、バルコニーからのとても素晴

らしい眺めに感激しました。コンサートがあったお部屋も、一段高くなったステージと客席とにうまく分けることができ、サロンコンサートにはもってこいのところで、ここが事務所だなんて・・・と驚きました。

私が演奏させていただいたコンサートは、いろいろな楽器の演奏者が参加し、そして、演奏された曲もヴァリエーション豊かで楽しんで聞けるものでした。また、お客様がとてもあたたかく聞いてくださったので、アットホームな雰囲気のあるコンサートになったと思います。また機会がありましたら、ぜひ参加させていただけたら嬉しいです。

松永 みなみさん(ピアノ)

先日は大変お世話になりました。ありがとうございました。なんととってもやはり、あそこからのブダペストの眺めが忘れられません。あんなに素敵な場所で演奏させていただいたこと、そしてリハーサルの時にいただいたお弁当をはじめ、当日もとてもおいしいお食事をあの場所でもらえたこと、本当に嬉しく思っています。聴いて下さった皆さんも、とてもあたたかい方たちばかりで弾いてとても楽しかったです。ありがとうございました。

珠玖 加奈子さん(フルート)

今回、演奏させて頂いたことには大変感謝しています。私たち音楽家は、日々自己向上のため努力し続けていますが、本来の目的である、人前で演奏する機会、その練習量に比べ、大変少ないものです。時間に見えますと、年間、何百時間、いや、何千時間の練習に対して、ステージでの演奏ははたして、どのくらいあるのか???そして、その1回の短い本番の中で、それまで準備したことを花咲かせなくてはなりません。たまには絶望の淵に立たされることもあります。コンサートは体験や、練習をする場ではありませんが、しかし、練習を積んでも積んでも、ステージでしか得ることのできない体験が、どんなに大きいことか。今回のような、機会は私共にとって大変ありがたく、これで又一つ大きく成長す

ることができました。今回、岩瀬桐子さん、森京子さんと共演させて頂き、本当に嬉しかったです。音楽の喜びを分かち合え、大変幸せでした。人生の貴重な時間、私共の音楽を聞いて頂いた方々に心から感謝しています。温かい拍手を頂く時、これからも頑張っ
て行こう!と元気づけられます。会場の事務所、素晴らしかったです。眺めも最高、そして、皆さんの作ってこられた手作りのお料理、本当に美味しかったです。演奏後のパーティーは、格別です。ちなみに、我が家は、私の練習の間、主人が一生懸命作って参上しました!すべてにおいて、大変、楽しい会でした。ありがとうございました。



香川真澄さん(ピアノ)

7月の晴れ渡る青空の中、素敵なホームコンサートに出演させて頂きました。ため息の出るような素敵な会場とブダペストの美しい景色を目にしなが
ら演奏出来たことは「幸せ」の一言です。今回

はヴァイオリンとピアノで日本歌曲「浜辺の歌」とアルゼンチンの熱いリズムを感じる「リベルタンゴ」に挑戦しました。想像以上に、浜辺の歌の持つ穏やかな美しさや、情熱的なタンゴの世界を表現することに苦戦しましたが、試行錯誤する中で改めて曲の良さを知ることが出来たのも非常に良い経験でしたし、これからは沢山の曲に出会い、少しでも多くの方々に楽しんで頂けるような演奏を目指したいと思います。今回、このような機会を頂いたことに心から感謝しております。



坂井圭子さん(ソプラノ)

以前歌ったモーツァルトのオペラ「コシ・ファン・トゥッテ」よりフィオルデリージの aria「岩のように動かず」を選曲した。毎日仕事をしているため、なかなか練習時間がとれない。昔の記憶をたどりながら、硬くなっている身体と喉のウォーミングアップにだけは努めた。会場でのリハは2回。ピアノだけでなく、ヴァイオリンとチェロが伴奏してくれたので、音響やバランスに気をつけながら集中してやることに努めた。

当日は、心地よい夏の一晩となった。立山研究所は、玄関を入ると天井まである窓の向こうに、まさにハンガリーの方々が望んでやまないパノラマが広がる。その景色たるもの、「圧巻!」としばし立ちすくんでしまうほどである。しかし、コンサートのお客さんを前に歌うと、その素晴らしい夜景は私の後ろに広がった。短い時間で仕上げなくてはならなかった本番ではあったが、弦楽器の音色に酔いながら aria を歌いきることができた。



次は、ぜひツィタデラの頂に立つ女神像に向かって歌ってみたいと思った。

前号の秋季号のホーム・コンサート記事の掲載に手違いがありました。ここに再掲して訂正いたします。なお、HPのPDF版は修正済みのものがアップロードされています(編集部)



2010年運動会集合写真



補習校秋のバザー



2010年4カ国対抗親善ゴルフ大会日本チーム



黄色い建物は、デブレツェンのシンボル・カルヴィン派大教会。10月1日~7日デブレツェンの上空を130機の熱気球が飛んだ。



集合住宅の公園から一斉離陸。右手前の気球に書いてある「BalloonPong」とはアメリカチーム・ホームページのURL。このサイトでは世界選手権の動画やレポートが次々にアップされた。もちろんスポンサーがついている。既存の新聞やテレビでは取り上げられない事柄も、インターネットの世界では素晴らしいコンテンツ。そして、そこにはスポンサーもつく。日本の熱気球界では未踏の領域である。



大気には、目に見えない空気の流れ~風~がある。風に乗って気球は漂う。見えない空気の流れも、多数の気球が浮かぶと見えてくる。写真上が風上。蛇行しながら写真下へ向かって風が流れている。

インターネットで人生の楽しさを広げましょう! オトナももっと遊ぶ時代

人生に夢と輝きを BYOOL SNS ~The Best Years Of Our Lives~

BYOOL SNS (Social Networking Service)は、大人が楽しめるユーザー参加型のWEBサイトです。スマートな大人が集まるグローバルな知的空間を目指しています。現在、10ヶ国の海外に住む日本人が参加しており、国を超えて、文化や政治・経済始め、幅広い分野において、情報発信、議論を行なっています。あなたの知的好奇心を満たしてみませんか?

★参加方法：事務局まで参加希望の旨、メールをお願いします。招待メールをお送りします。

BYOOL事務局 Email: admin@byool.com 「BYOOL Bloggers」 <http://www.byool.com>

★お問い合わせ：上記事務局アドレスまでお問い合わせください。

日記・エッセイ



自分のページを持てる。
日記、エッセイ、ブログ、
記録として。

コミュニティ



同じ興味・関心を持つ
仲間の交流の場。
OB/OG会にも。

豊かさ・輝き



様々な人の意見・情報のシェア、
そこから生まれる新しい
発見や気づきが、
人生を豊かに輝きあるものに。

安心・安全



無料会員制。
SNSのメンバーだけが利用
できるクローズドなサービス
なので、安心安全。

書き込みはすべて非公開にできますので、スケジュール管理や、何か自分の記録をつけたり、コミュニティをグループの連絡用に使用していらっしゃるメンバーもいます。

BYOOL Selection

BYOOLでは、品質にこだわり抜いた無農薬・有機栽培の緑茶知覧茶・有機緑茶と、コクのある味わいの知覧茶・深むし茶を皆様にご紹介しております。

国内でも有数のお茶の産地として知られる鹿児島県知覧町の、全国茶品評会などのコンクールで、上位入賞経験を持つお茶園から、直接取り寄せました。環境に優しく、そして、人に優しいお茶で、心落ち着かす優雅なひとときをお過ごしください。 **BYOOL Selection:** <http://byool.open365.jp/>

さくら

DESIGN

CI、広告、ロゴ、ホームページ等
名刺1枚からご希望の言語にて
デザイン致します。

各種パッケージ、インテリアのデザイン、
内装工事、翻訳から印刷まで
幅広く受け承っております。
お気軽にお問い合わせ下さい。



SAKURA DESIGN: info@innerdesign.hu

Inner Design Group · 1021 Budapest, Bognár utca 7.

Tel/Fax: 1-200 3213 · Mobile: 06 20 480 4431

www.innerdesign.hu

Propart Hungary Bt.

各種コンサート企画・製作・国際交流イベントを
中心とした業務の運営。ハンガリーを拠点にグ
ローバルな企画・マネジメント展開を行って
います。お気軽に、御相談下さい。

- ・音楽企画/マネージメント
- ・若手音楽家の育成サポート
- ・国際交流事業企画運営
- ・留学/音楽研修サポート
- ・短/長期賃貸物件仲介
- ・各種通訳
- ・翻訳サポート
- ・買い/レンタルピアノ仲介
- ・輸入/輸出楽器仲介

ハンガリー国内出張演奏、
各楽器講師紹介なども随時承っています。

Propart Hungary Bt.

Address: 1089 Budapest, Kőrös utca 25. II/6

Tel&Fax: +36-1-786-7846

Mobil: +36-70-3815548

e-mail: propart@chello.hu

web: <http://propart.client.jp/>

Propart